

季  
刊



KIKAN  
KADENSHA  
vol.03  
2016/3/31

## 映画・舞台は人生を創る行為だから

実演家・スタッフの仕事環境は様々です。私は父がアクション監督で道場をひらいていたので、スタントも10代からやっていました。経験を重ね、道場を継いだのは、ちょうど映画の全盛期が終わりかけた1970年代です。以来エンターテインメントの産業構造は変わり、制作環境は変貌を遂げました。かつて映画俳優やスタッフは映画会社に雇用されていましたが、リストラされほとんどがフリーランスになりました。事故やケガも多い現場に関わらず、社会保障がない状況です。

映画フィルムからビデオ、DVDとメディアが変わるたびに制作予算も下がり続け、このしわ寄せは、現場に来ます。逆に言うと現場の忍耐が業界を支えています。そんな環境ですが、若者は夢を求めて集まってきます。だからこそこの構造はなかなか変わってゆきません。実演家・スタッフの実態調査からも、こうした窮状を読み取ることができます。一刻も早くこの問題を広く共有し、解決していきたい。なぜなら映画・舞台は人生を創るような神の領域にも触れる行為だから。責任をもって作品制作ができる環境が必要なのです。

高瀬将嗣 (殺陣師・日本俳優連合)

[芸能実演家の活動レポート\_1]

## 数字にみる芸能実演家の活動と生活実態

芸団協では、1974年から5年ごとに実演家を対象に、仕事と生活の実態についての大規模アンケート調査を実施している。俳優・音楽家・舞踊家・演芸家などの活動内容や収入、ケガ、仕事や生活に対する考え方をジャンルごとに集計することで、それぞれの特性や働き方が浮かび上がってくる。

スタジオミュージシャン、オーケストラ奏者、ソロミュージシャンなどが回答している洋楽は、

個々人で仕事の現場や収入が変わってくる。また、現代演劇もアルバイトで生計をたてる若手から、舞台やメディアで活躍する人まで多種多様。「活動別収入の割合」から、全体的にライブ活動が基本となっているのは、落語家やマジシャン、曲芸師などが回答している演芸(67.8%)だ。教える仕事の割合が最も高いのは洋舞(58.5%)で、バレエや多様なダンスの教室が、幅広い年齢層に人気を

得ていることからもうなずける。

「収入分布」で特徴的なのは、三味線、お箏、尺八などの邦楽、邦舞(日本舞踊)で200万円未満が4割以上と高くなっている。このジャンルの回答者は女性が多く(邦楽67.3%、邦舞85.2%)、「活動別収入の割合」でも教える仕事のほか、不動産や年金等の実演以外での収入割合が高いことから、芸能を生業としていない層が多く含まれていることが読み取れる。一方、全体的に収入が高い傾向にあるのは、能楽や歌舞伎といった伝統演劇だ。アンケートの調査対象となる

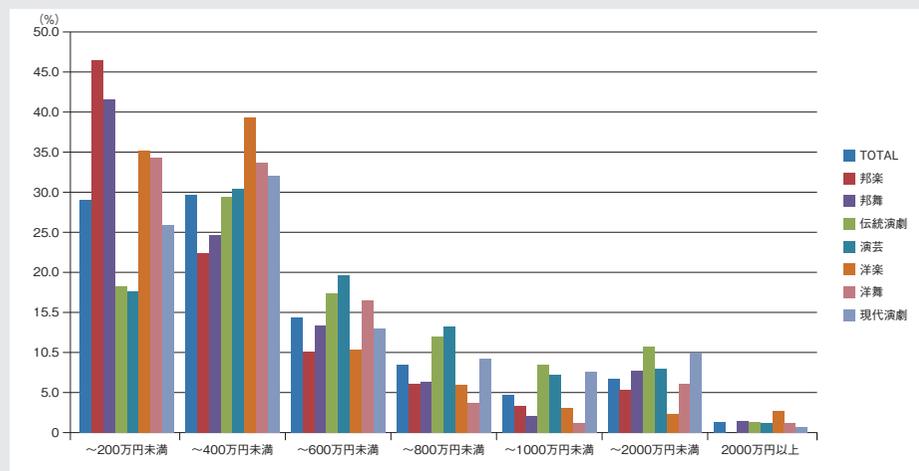
協会に所属するのは、プロのみ。幼少期からの長い修業期間を経た上での活動の基盤が、一定程度つくられているのだ。

このように、多種多様な芸能実演家の実態を、集計データから客観的にとらえることは、各ジャンルへの理解を深める手助けとなる。過去の調査と比べても、ジャンルごとの収入構成や働き方に大きな変動はない。それだけにその時々の実態を再認識し、加えて時事的な意識を問う機会となっている。実演家自身、そして行政や一般の人々と問題意識を共有する際の基礎資料として活用されている。

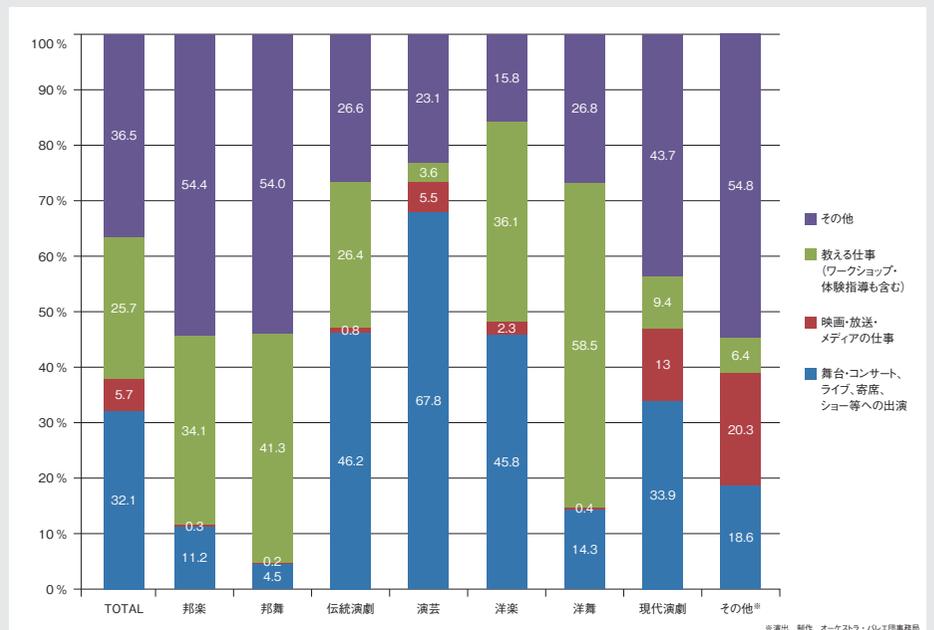
### 実態調査特設サイト

<http://www.geidankyo.or.jp/research/life>

スタッフの調査を含む報告書、『知って得する労災保険のキホン』小冊子、各シンポジウムの記録をご覧ください。



ジャンルごとの収入割合



活動別収入の割合

※演出、製作、オーケストラ・バレエ団事務局

[芸能実演家の活動レポート\_2]

## シンポジウム:実演芸術は生活に不可欠か?

—今日の社会における芸能の価値を考える

実演芸術は人々の生活にとってどういう存在か。不可欠という人もいれば、関心がない、あるいは触れる機会がないという人もいるだろう。実演芸術がもっと身近になるには、どうすればいいか。シンポジウムでは、メディア関係者などをパネリストに迎え、そのポイントを探った。

まず問題提起として、社会デザインを専門とする中村陽一氏が、「批評の場が未成熟」「実演の場が限定され閉ざされている」ことを挙げた。批評は、人々が芸術を話題にして身近なものにすることに繋がるが、日本では海外に比べ批評が少ないと言われている。これに対し山口宏子氏は、新聞は紙面が限られているため、掲載がすでにひとつの評価と言う。消えてしまう実演芸術が、その社会、時代にどういう位置づけであったかを伝えるのが新聞評の役割だと思うと語った。ネットでカルチャー情報サイトを運営する杉浦太一氏も、作り手に向けては批評が必要だが、一般に向けてはより興味をもってもらえるように、クロスジャンルでの対談を設けるなど編集の工夫を明かした。

ラジオを通して、“いい音楽”を紹介し

続けているピーター・バラカン氏は、ライブハウスの状況について一石を投じた。アーティストが会場代を負担してチケットを売って内輪の公演で終わるという状況では、実演家が育ちにくい。他ジャンルも同じで、「場」が身近にあることが必要だが、困難になってきている。バラカン氏は実演芸術は不可欠と思っている人々が感動、情熱を伝えることが課題だと指摘した。

アメリカでアートに関わってきた菊池宏子氏からは、食わず嫌いをなくすために、実演芸術へのアクセスを多様にして、その人にあった方法で面白さを伝えていけるよう、時間をかけて文化を育てていくこと、社会的なムーブメントをつくっていくことの必要性が示された。最後に山口氏はプロの身体、技のすごさにもっと注目して欲しいと語り、中村氏は、ムーブメントをおこすのに、実演芸術が好きという人から第2、第3のフォロワーにどうやってつなげていくのか、一緒に考えていきたいと締め括った。

※本シンポジウムの記録は、実態調査特設サイトからご覧いただけます。

<http://www.geidankyo.or.jp/research/life>

日時= 2016年3月1日(火) 13:30~15:30

会場= 東京芸術劇場シンフォニースペース

登壇者= 菊池宏子(アーティスト、コミュニティデザイナー)

杉浦太一((株)CINRA代表)

中村陽一(立教大学21世紀社会デザイン研究科委員長・教授)

ピーター・バラカン(ブロードキャスター)

山口宏子(朝日新聞社論説委員)

進行= 福島明夫(芸団協常務理事、青年劇場代表)



## 7ヵ月のお稽古から、晴れ舞台へ [キッズ伝統芸能体験——謡・仕舞コース]

大きな松を背景に屋根をいただいた能舞台が、すばりと建物の中に入っている。舞台空間の不思議や、演目について語ってくれるのは、葛西聖司さん(元NHKアナウンサー)。「キッズ伝統芸能体験」(謡・仕舞、狂言)の発表会は、初めて能楽堂に足を踏み入れた人も含め、観客みんなが、可愛い子ども達の晴れ姿に目を細めながらも、古くから続く日本の文化を学ぶ機会ともなった。

本来は1対1で行う稽古。性別も学年もいろいろな子ども達を前に、指導する先生方も一苦労だ。発表会の1ヶ月前、謡・仕舞の稽古を訪ねた。能の脚本にあたる謡の一節を声に出して謡うことと、舞台での作法、足の運びから舞うことを交互にやりながら、身体で覚えていく。毎年ご指導いただいている宝生流能楽師・前田晴啓先生は、「全部で16回の稽古といえど、それはごく短期間。最後の発表に向かって、仕舞の順番を覚えるので精一杯です。しかし子どもは、意味がわからなくても、見よう見まねで身体で覚えていく。畳や正座の文化にふれ、身体で覚えたものは、一生忘れないでしょう」と語る。

3月21日の発表会当日、本番を終えた子ども達に司会者が「今日は何点?」と尋ねると、みんな「100点!」と元気よく答えた。大勢の人が見守る中、堂々とやり遂げることができた。能舞台に立った経験は、大きな自信となり、日本文化の原体験として生き続けるに相違ない。



キッズ伝統芸能体験発表会[能楽(謡・仕舞、狂言)]  
日時=2016年3月21日(月・祝) 13:00~17:00  
会場=宝生能楽堂



「キッズ伝統芸能体験」は、子ども達が一定期間にわたって伝統芸能の一流の芸術家から指導を受け、その成果を本格的な舞台上で発表する特別プログラム。2015年度は、能楽(謡・仕舞、狂言)、長唄(三味線、囃子)、三曲(箏曲、尺八)、日本舞踊を実施。9月から翌年3月までの7ヶ月(16回)と、中高生向けに12月からはじまる4ヶ月(10回)の2コース。小中高生は誰でも応募できる。お稽古や発表会の様子は、NHK Eテレ「にっぽんの芸能」で5月に放送予定。  
主催:東京都/アーツカウンシル東京(東京都歴史文化財団)/芸団協

## 劇場・ホール2016年問題の 解決に向け

2月19日、野村萬会長はじめ役員数名で東京都庁を訪れ、舛添要一知事に施設不足に対する早急な対応を求めました。都は施設不足の問題について調査を行った上で、具体的な対応を検討するとしています。芸団協では、引き続き、問題解決に向けた働きかけを行っていきます。



### 新しい花伝舎パンフレット

2015年に大規模改修を行った芸能花伝舎。来訪されたことのない方にもわかりやすい、各スペースの写真入りパンフレットを作成しました。施設利用をご検討の方・パンフレット送付をご希望の方は、ウェブサイト「お問合せフォーム」よりご連絡ください。

### [花伝舎カレンダー] 芸能花伝舎を拠点に展開している事業いろいろ

#### 5/5 「芸術体験ひろば2016」

子どもたち・ご家族で楽しめる「芸術体験ひろば」。開催12回目の今年も、乳幼児から小学生を対象とした演劇、伝統芸能などの鑑賞や体験などの様々なプログラムを予定。会場は、校庭いっばいに鯉のぼりが泳ぎ、地元町会や商店会による各種模擬店や物産販売等も。

<http://www.geidankyo.or.jp/12kaden/>



## 公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会

● 東京オペラシティ事務所  
〒163-1466 東京都新宿区西新宿3-20-2  
東京オペラシティタワー11階  
Tel:03-5353-6600 Fax:03-5353-6614

● 芸能花伝舎事務所  
〒160-8374 東京都新宿区西新宿6-12-30  
Tel:03-5909-3060 Fax:03-5909-3061